

2019アジア選手権報告書

参加団体名： チョープロ

氏名： 北野 雄一

種目： M2- (Men Pair)

0. 遠征概要・準備

第97回全日本選手権大会（以下、全日本選手権）が2019アジア選手権（以下、今大会）の代表単独クルー選考会となり、M2-種目においては初期段階での種目実施が決定されていたことにより、全日本選手権での同種目の優勝を経て代表クルー選考の権利を得る事となった。

本年6月より貴協会中村団長・千田国際委員長・事務局、藤田様と適宜連絡を行い、エントリーと艇輸送についての各種段取りを無事完了する事ができた。

当初、使用艇：swift社（オール：croker）でのレンタル対応であったが、海外遠征の経験豊富なチームの指導者陣のご提案と貴協会のご尽力により、日本からのコンテナ輸送が可能となり便乗させていただく事となった。当初10月頭の戸田での積込予定であったが、茨城国体への遠征と併せて自艇の輸送を検討していたが、結果的には戸田中央総合病院RC様のご協力の下、通常使用している同型の艇（Filippi F13）とオール（concept skinny）にて大会を迎える事ができた。

この場を借りて改めて、弊社クルーの参加にご尽力いただいた関係者に深く感謝申し上げます。

1. レースの展開、結果、反省点

今大会は当初、7か国のエントリーであったが、「THA」の棄権により6か国となった事で、24日：Preliminary → 27日：FinalAのプログラムとなった。

本年、東日本は台風19号等の影響で甚大な災害に見舞われたが、九州（長崎）でも例年以上に悪天が続く十分な準備ができないまま今大会に臨む事になった弊社クルーにとっては、大会最終日のFinalA（一発決勝）は有難かった。

○Training：21～23日

初日で艇のセッティングは完了し、午前中にレーススペース・スタート練習、午後はUT主体のトレーニングを行い、23日には最終日を視野に入れ500mMAXを取り入れた。

■Preliminary：24日

スタートのトップスピードと、レース後半のスピードの維持がクルーの特徴であると考えており、国際大会の舞台でどこまで通用するか未知数なままレースを迎えた。

結果は、0-500m からトップ「INA」と水か空き（4秒ビハインド）、メダル圏内「IND」・「HKG」と約1艇身（2.5秒ビハインド）と、完全に追う苦しい展開。1000mでトップと8.6秒 1500mで13.2秒とコンスタントも少しづつ離される展開となった。第4Qでは「JPN」もスピードアップできたものの、上位クルーも同様にスピードを上がりが態勢は大きく変わらずレースを終えた。

なお、6着の「KOR」に艇計量が行われた。

○Training : 25~26 日

選手のヒヤリングと Preliminary の反省から、テコ比を少し軽いセッティングに変更し改善が見られた。25 日のトレーニングは中負荷の RP 確認とスタート練習に充て、26 日はリカバリーにて FinalA に備えた。

■FinalA : 27 日

0-500m から積極的に仕掛け、前半をトップ集団の中でレースに入る事をメインフォーカスとし臨んだ。

0-250m をトップ集団で展開、その後少しずつ差がつくものの 0-500m をトップ「INA」・「IND」から約 3.2 秒、メダル圏内「HKG」・「UZB」から約 1 秒で通過。第 2Q も積極的展開し、1000m でトップと 5.1 秒と Preliminary から大きく改善が見られた。

第 3Q は、トップ集団「INA」・「IND」・「UZB」・「HKG」が随時入れ替わりながらのサバイバルレースとなった。「JPN」はそこから 2 艇身後方に位置する。

第 4Q は、上位 4 クルーから「IND」が脱落し、「JPN」・「KOR」が詰める展開、最後は「KOR」の猛追から逃げ切る形で 5 位にてゴール。4 位「IND」とは約 2 秒であった。

優勝は Preliminary でもトップであり、激しいトップ争いを制した「INA」、2 着は「UZB」、3 着は「HKG」であった。(※「INA」:2017 年 U23 BLM4-:③位、WcupIII LM4-:④位 「UZB」:今大会 M8+優勝:3 番ペア・前回アジア大会 M2- :②位 「IND」:今大会 M8+③位 S ペア の模様)

2. 国際大会を経験して良かったこと、困ったこと、今後のボート人生にどのように影響するか

他国との選手、文化の交流をローイングを通じて触れる事ができ、豊かな価値観を得る事ができました。また、日本チームとして行動を共にする事で新たな交流もでき人脈を広げる事ができ、今後の競技活動の中で大きく活かされると思います。

競技面では、国際大会の経験がモチベーションと自信に繋がり、弊社チームだけでなく周りにも良い作用をもたらせてくれると感じています。特に地方を拠点とする弊社チームではその傾向は強いと考えており、今後この経験を周りに伝達して行く事が責務であると考えています。

今大会が行われた「Tangeum Lake International Rowing Regatta」は、素晴らしい会場であり、レース、トレーニング、ウォーミングアップ、艇保管、栈橋、会場内 FreeWi-Fi、周辺環境等あらゆる施設面が充実しており、ストレスなく過ごせました。期間中、天気にも恵まれましたが(最終日、濃霧により若干のスケジュール変更)、仮に雨天でも選手が雨を凌いだりできるスペースは確保できていたと思われます。

海外特有のやむなき事項を除き、特に困った事は感じませんでしたが、中村団長はじめ日本チームの皆様に助けていただいた点が大きいと思います。

レースに関して経験した想定外の事項を挙げると、Preliminary の出艇・監視の際には特に指摘を受けなかったストレッチャーのワンタッチリリース(ストレッチャーの面ファスナーを紐等で 1 本化しワンタッチで外せるようにする)を、FinalA の出艇・監視時には改善を求められ、直ちに応急的に改善し事なきを得ましたが、場合によっては時間を要した可能性があった点が挙げられます。(ヒールロープは当然ながら最初から厳しくチェック)

最後に、初めての国際大会でしたが、無事に何事もなくレースが終えたのも、日本選手団(スタッフ間)で情報を共有化でき、各チームの垣根を超えて協力する体制があったからこそだと感じました。

改めまして関係者の皆様に深く感謝申し上げます、報告書といたします。

以上